

話題 其の55：“地震への恐怖”

2月11日午前10時20分頃、ヨルダン生活の約3年ではじめてまともな地震を経験しました。多分震度2~3くらいだと思われませんが、それでも揺れが収まるまで不安な思いでした。

(同僚の話では震源は死海の北部で震度は4.9との事でした)

揺れが収まってから非常ベルが鳴り出し、職場の同僚達が一人、二人と外へ退避を始めました。多くの人たちは、2棟のビルの中に避難しており地震被災の経験の無さを物語っています。それでも一緒に様子を見守っていた同僚は「地震の時にビルの中に避難するなんて危険だよ」と呟いていました。そもそも地震が少ないということで5~6階建てのビルでも柱や壁に鉄骨を使用する事も無く、直径2cmほどの鉄棒が鉄筋として利用されているだけです。

職場の年配者に聞くと「もうかなり昔に地震を経験したけど、今回の方が大きく揺れた」そうで、石とセメントの重量構造物の中に住んでいるので、大きな地震発生時には大きな被害が予想されます。先月のイラン地震が頭をよぎります。

地震発生後から約30分、再度非常ベルが鳴り響き、職員全員が寒い屋外に招集され、ビルから離れた場所で約1時間余震を警戒した対策行動を取り、その後帰宅指示を受けて12時には全職員が帰宅しました。帰宅しても、地震の不安から逃れる訳でもないのですが、多くの政府機関や教育機関が同じような処置を取っています。

昔、『竜馬が行く』という本に弱虫な竜馬がお寺の坊さんにいつ落ちてくるか解らないような大きな岩が常に頭上にある様なイメージトレーニングを指示されて“肝を練る”修行をしたと書いてあったことを思い出しました。この地震以降、私にももう一つの修行が始まったような気がしています。

話題 其の56：“降雪への恐怖”

2月14日、週末に帰宅していた青年海外協力隊の友人を送って、アンマン北部のアジュルンという土地までドライブしました。

ヨルダンの観光地ジェラッシュの手前を左折して、道は緩やかな坂を登って行き、標高が上がっていくのが解ります。アジュルンに近づくに従って粉雪が舞い始め、オリーブ畑がうっすら雪化粧をはじめていました。

友人宅についた頃には「本格的に降りそうだ」との判断で、すぐさまアンマンに取って返したのですが、時すでに遅しで、2~3kmも走った主幹道路では10cmほどの積雪で常用車がスリップして道をふさぎ、私も同行したJICA専門家の友人や道行く現地の人たちに助けられながら帰路を急いだのですが、結局4時間ほどその場で様子を見ていました。

午後7時ごろ、雪も小ぶりになり、除雪作業車(ブルドーザー)の後ろを追うようにアンマンとは反対方向の死海方面に車を走らせました。

現地の親切なドライバーに「この道を下って行くとT字路にぶつかるから、そこを左折するとサルトの街を通過してアンマンに帰れる」と教えられ、一時は安堵したものです。

私達二人は、死海方面に向かってどんどん下っていきました。車に備え付けの温度計が0度から少しずつ上昇しはじめ、一時は10度にもなりました。順調にT字路を左折し再びアンマンに向けての登り坂が始まりました。対向車のパッシングライトに「なに？」と訝りながらも登っていくと数台の車が雪に阻まれ、立ち往生していました。下りの対向車線には既に道路から滑り出してまっすぐに壁に突っ込んである車さえあります。

アンマンに住む職場の友人に電話すると「アンマンも雪が振り出したので死海方面に下ったほうが安全だ」とのこと。やっとの思いで車をUターンさせ、慎重に坂を下って、午後9時半、死海のホテルに辿り着きました。

翌日、アンマンと死海を結ぶ道路も除雪を終え、どうにかアンマンまで帰ることが出来ました。昨年の大雪は自宅でじっと様子を見るだけだったのですが、今年の降雪は恐怖体験でした。
